

『從容録』における証について

——『碧巖録』との比較を通して——

西 岡 秀 爾

はじめに

「証」は仏教の根本問題であると同時に、禪の中心問題である。本論は、『從容録』における「証（悟り）」の理解について『碧巖録』との比較を通して若干の考察を加えるものである。曹洞宗は見性悟道を強調せず、臨済宗は強調するところがあるが、果たしてそのような顕著な違いが『從容録』・『碧巖録』の著作にみられるのであろうか。今回は「証」に焦点をあて論をすすめてみたい。

一、『從容録』と『碧巖録』における証の共通理解

①表現不可能 『從容録』七五則示衆に「智不到處切忌道著」〔從一二五下〕とあり、七七則示衆に「如人畫空下筆即錯」〔從二二九上〕とある。絶対の真理は智慧で分別することはできないし、言語表現してはならないという。九六則本則著語に

「出身猶可易 脱體道應難」〔從一六三下〕と示されるように、悟ることはまだ容易であるが、その悟りそのものを言語表現することは難しいのである。一方、『碧巖録』では表現不可能なところを「満口含霜」〔碧一七下〕と比喩表現で語り、悟りの境涯は「縮卻舌頭」〔碧一七六下〕のところで言葉につまるとある。このように悟り（証）は、分別判断や論議を超えたところであつて、表現するのは難しく、的確に表すのは不可能に近い。まさに「口を開けば便ち錯り、擬議すれば即ち差う」〔碧二六八下〕ところである。

②二元超越世界 悟りの妙境は、長短・好悪・能所・迷悟・凡聖などの「兩重関」・「兩頭」を「打成一片」し、「射透」・「撒開」したところである。迷いはもちろんのこと、悟りをも超越しなければならない。それゆえ、悟りに安住することを戒めるのである。『從容録』四六則示衆〔從七九上〕・五七則示衆〔從九六下〕等で「以楔去楔」という。迷という楔を悟という楔で取り除いても、楔の取り除かれた跡が残ってしま

う。迷悟共に妄分別にすぎないから、悟りをも超えなければならぬ。九六則頌古で「月巢鶴作千年夢 雪屋人迷一色功」（従一六四下）と比喻でもって示されるように、悟りに安住することは戒められる。よって、万松は「切忌生根」（従一六五上）・「掣斷黃金鎖」（従二一八下）と、悟りの境界に根を生やしてはならないし、悟りの繫縛をひきちぎらなければならぬと強調するのである。一方、『碧巖錄』でも悟りの位を離れず留まっていたは「鬼窟裏活計」に陥ってしまうと数十箇所に渡って繰り返し述べられる。その他にも「黑山」・「毒海」等、悟りに安住してしまふ過ちを比喻でもって表す。

③**仏向上事** 『從容錄』七九則本則は、長沙景岑の語を引いて「百尺竿頭坐底人雖然得入未為真 百尺竿頭須進步十方世界是全身」（従一三三下）とある。悟りに安住してはまだまだ真の悟りではない。さらに歩を進むべきことを説く。さらに八九則示衆では迷悟超越しても「更買草鞋行脚始得」という。悟りのうえの修行を続けていかなければならないのである。『碧巖錄』でも、六〇則示衆で修行を怠れば元鞘に戻ってしまう。悟ったとしても向上の一步を踏むことを勧導する。

④**日常生活即仏作仏用** 『從容錄』一二則頌古に「種田搏飯家常事 不是飽參人不知」（従二四上）とある。田を植え飯を握って食べるなど平凡の生活であつても、この喫茶喫飯の外に仏道があるわけではない。これは仏道に参じ十分に究め尽

くした人にしかわからないという。さらに、四二則示衆では龐居士の語を引いて「洗鉢添瓶 盡是法門佛事 般柴運水 無非妙用神通」（従七四上）と説き示す。『碧巖錄』でも、七四則垂示で「田地穩密處 着衣喫飯」（碧三三下）というように、悟りのおだやかな境界は著衣喫飯にほかならない。日常生活そのまゝが仏作仏用であると説かれる。

⑤**三世十方世界仏** 『從容錄』五四則頌古著語に「豎究三際 橫徧十方」（従九三下）とある。仏身は時間空間を超え三世十方世界に徧満している。さらには六四則頌古に「離念見佛 破塵出經」（従一〇七上）とあるように、妄念を離ればそのまま仏であり、到る所が仏の教えとなるのである。徧法界仏身であり、尽大地經卷である。『碧巖錄』九九則垂示に「徧界不藏 遠近齊彰古今明辨」（碧三〇八上）とあり、六五則垂示に「無相而形充十虛而方廣」（碧二二下）とある。仏のはたらきは古今三世に渡って目の前にそのままあらわれている。さらには固定された形相がなく、十方世界に充満している。しかし、それに気づかないために「賊を抱いて屈と叫ぶ」（碧二四七上）ことになる。

⑥**自由自在** 『從容錄』三一則頌古に「隨類三尺一丈六 明明觸處露堂堂」（従五八上）とあるように、仏のはたらきは衆生の機根に応じて自由自在に変化し、尽十方世界どこにでもあらわれているという。仏身は尊嚴がありすべてを脱落した

ような姿（『巍巍堂堂 磊磊落落』從七八下等）であり、そのはたらきは自由自在（『宛轉偏圓』從七二上）で、游戲三昧の境地（『游戲神通大三昧』從一五六下）である。『碧巖錄』でも悟境の自由無礙な所は比喻等で説かれる。八則垂示に「會則途中受用 如龍得水似虎靠山 不會則世諦流布 羝羊觸藩守株待兔」（碧三九下）、三九則垂示に「途中受用底 似虎靠山 世諦流布底 如猿在檻」（碧一四六上）とある。悟らなければ、生垣に角をとられ身動きできない牡羊、兎が株に自らあたつて倒れるのを待つ男、檻に入れられた猿のように不自由である。しかし悟つたならば、水を得た龍、山に放たれた虎のように自由自在であるという。またその働きは水の上を歩き、刃の上を走るように危険な状況下でも自在に切り抜け（『向冰凌上行劍刃上走』碧一五二上・碧一六六上）、煩惱を粉碎する智慧の劍（『金剛王寶劍』碧二六三上）を手にいれたようなものである。悟りの法界は無礙自在（『七縱八橫』碧三六下等）であり、「正理自由」（碧二七五上）である。以上、『從容錄』にしる『碧巖錄』にしる、悟境は「八面櫺櫳」・「灑灑落落」・「淨保傑赤灑灑」等、天真爛漫でからりとした様子、はたらきであることを繰り返して説いている。

二、『從容錄』における証の特徴

①本来の面目 宏智は二〇則頌古で「而今參飽似當時：三十

年前行脚事分明辜負一雙眉」（從三八上）と示す。修行し尽くして今になると昔とそっくりで、修行をはじめた三十年前と同じである。本来の面目は修行の前と後で変わらない。まさに眼横鼻直、一雙の眉はあいかわらず同じである。万松はこの箇所を「吾猶昔人非昔人」（從三八上）と著している。修行の前後において眼横鼻直で全く変わりはないが、そのはたらきにおいて昔とは異なると説明している。八六則頌古には臨済が大愚のもとで悟つた様子を「迷雲破處太陽弧」（從一四七下）と表す。この箇所の万松の著語は「舊時光彩」とある。つまり転迷開悟したとしても、悟りの光彩は何も新しいものではなく前からのままである。悟つたとしても、それは本来の面目に気づいたにすぎないのである。

②向上易く向下難し 八九則頌古に「荊棘林中下脚易 夜明簾外轉身難」（從一五三上）とある。宏智は迷いの棘から脱け出し悟りの境界に到るのは比較的易しいが、悟りの境界に安住することなく、向下に舞い戻ってくるのは難しいと示す。万松も五六則本則著語で「自地昇空易：從空放下難」（從九五下）と説くことから宏智に賛同していることが理解できる。

③悠々とした世界を強調 二〇則頌古に「家門豐儉臨時用 田地優游信步移」（從三八上）とある。なにものにも束縛されず、臨機応変・自由自在・悠々自適に自分の調子で歩いていくことが強調される。悠々と胸をはり（『寛行大步』從一二二

上・従一三三下）、日常生活を送ることがそのまま仏作仏用であり、太平安穩なる境地（家邦平帖 従二一八下）なのである。題名の示すとおり、ゆったりとのんびりした境地こそが『從容録』のもとめる所である。

④黙坐 二則頌古に「寥寥冷坐少林 黙黙全提正令」（従八上）とある。達磨が少林寺に帰って面壁九年したところを頌した箇所である。煩惱滅却し、壁に向かい黙黙と坐禅することがそのまま仏祖の正しい教えを丸出しにするという。『碧巖録』一則は同じ古則を扱っているが、周知のごとくこのような解釈はなされない。後に曹洞宗に重んじられるようになる默然端坐の宗風が端的に示されている箇所である。

小結

以上二書の比較検討により、『從容録』の「証」の特徴が明らかになった。説示において基本的には『碧巖録』と大きな違いは認められない。迷悟の二元対立を乗り越えたところが真の悟境であり、日常生活そのままが仏作仏用である。そして、その境地はなにもにも束縛されず自由自在であることを説くところは同じである。異なるのは、『碧巖録』は修行の前と後の境地に一応の違いを認めるのに対し、『從容録』は大した隔たりはないと説くことである。『從容録』は、本来の面目に気づくことが大切であり、悟りに縛られることなく

悠々自適に生きていくことが強調される。そして默然端坐が仏祖正伝の教えであることが明確に示されるのが大きな特徴である。さて今回の論考では二書の全体に渡って比較したため、『碧巖録』における雪竇と圓悟の考え方の違い、ならびに『從容録』における宏智と万松の思想的相違についてなど詳細な検討が欠如している。さらには評唱部分の精査な検討、本則に立ち返っての考察など残された課題は多いが、今後の研究課題としたい。

- 1 『從容録索引（連山交易頭注本）』（禅文化研究所、一九九二年）の略。
- 2 石井修道『禅語録傍訳全書第一二卷 從容録Ⅲ』（四季社、二〇〇三年）九〇則解説（二一〇頁）参照。
- 3 『碧巖録索引（種電鈔）』（禅文化研究所、一九九一年）の略。
- 4 末木文美土「禅の言語は思想を表現しうるか―公案禅の展開―」（『思想』（九六〇号、二〇〇四年、四七頁）参照。
- 5 原田弘道氏は、禅において説かれる主體的な「自由」は「悟」「証」「涅槃」「解脱」等と共通概念を有していると指摘する。（禅における悟りと真理」『駒澤大学仏教学部研究紀要』三二号、一九七四年、一七〇―一七一頁参照）

（紙幅の関係上、大半の注記を割愛した）

〈キーワード〉 從容録、碧巖録、証、家邦平帖

（花園大学大学院）

28. Trends of Practice among Disciples of Nanyue Huisi According to the *Xu Gaoseng zhuan*

Akinori MUTŌ

I have researched disciples who were guided by Nanyue Huisi (南岳慧思), Tiantai Zhiyi (天台智顗) and various teachers of Tiantai, and those who practised Chan meditation in Mt. Tiantai (天台山) referring to the *Tiantai Zhizhe Daishi biezhuàn* 『智者大師別傳』 and the *Guoqing bailu* 『國清百錄』 as supporting materials.

As a result, it was possible to confirm 41 disciples including not only priests but also laymen by means of searching “changan 禪觀 (sitting in meditation)”, and “chanfa 懺法 (method of repentance)” recorded in the *Xu Gaoseng zhuan* (『唐高僧傳』).

In this thesis, I have focused on such disciples as Huicui (慧璀), Huicheng (惠成), Huiming (慧命), Zhiyi (智顗), Huiyao (慧耀), Huichao (慧超) and Huisi (慧思), and tried to examine the trends in which Buddhist ascetics led and trained by Nanyue Huisi practised Chan meditation, based on the *Xu gaoseng zhuan*.

In a concrete form, I have tried to examine what kinds of training methods were practised by disciples belonging to the Huisi group, and in which regions in China they existed, in accordance with philological methods.

29. “Enlightenment” in the *Congrong lu* in Comparison with the *Biyān lu*

Shūji NISHIOKA

Enlightenment is a fundamental issue in Buddhism, and it is the central concern of Zen as well. This study examines the understanding of enlightenment in the *Congrong lu* in comparison with the *Biyān lu*, with some observations made. In regard to the stages of training and the fruits thereof, the *Congrong lu* does not recognize any significant differences, but the *Biyān lu* accepts a tentative difference. Therefore, it is important to realize the essence of humanity (the “original face”) in the *Congrong lu*, and a major fea-

ture of that work is its emphasis on living freely without attachment to the concept of enlightenment.

30. A “12 Division of Time” in Chan — Dunhuang document Pelliot chinois #3604

Szu-wei LU

This document is based on the division of time named “the twelve horary signs,” and elaborated in the twelve kinds of verses. The unknown author of this document states his thought and practices of Chan through these verses. This was formed under the influence of the Northern Chan School before the eighth century, characterized by Nembutsu (Buddha-Contemplation)-Chan syncretism.

31. The Problem of *An Account of the Coming East of Huineng's Dingxiang*

Young-sik JEONG

In this article, I have examined a Korean text *An Account of the Coming East of Huineng's Dingxiang* written by a Korean monk Kakhun (覺訓). It tells the story that a Silla monk Kim Deabi (金大悲) tried to cut the head off the corpse of Huineng, an episode mentioned in the *Jingde Chuandenglu* (1004). However, this document is based on two materials: the *Sanggaesa jingamsōnsa daegong tappi* 双溪寺真鑑禪師大空塔碑 and the *Samguk yusa* 三国遺事. Two problems are focused on here. First, a ‘Dingxiang’ portrait of a Chan master is equivalent to a ‘head’; second, the creation of the monk Kim Deabi 金大悲 just originated from a sentence that “there is a statue of Taebi 大悲 in Paengnyul (栢栗) Temple”.

32. The *Kettō Jushuin Gimonshō* (決答授手印疑問抄) of Ryōchu (良忠)

Kōjun HAYASHIDA

This paper is a study about the reason why Ryōchu (良忠) wrote the *Kettō*